

『日本の植民地政策とわが家の歴史』の発刊によせて

川村晃生（かわむら てるお）

慶應義塾大学名誉教授・環境人文学者／文学博士
「ストップ・リニア！訴訟」原告団長

人はいかなる血筋のもとに生まれるかを選ぶことはできない。日常を生きていく上で、一般にそれは大した意味を持つわけでもないが、しかし時々ふと自らの先祖に立ち戻って自身を確認し、自身の立ち位置や生き方を彼らに比して見定めるといようなことはある。それは「デラシネの不安」と言えば言えるようなものかもしれないが、たとえば山口瞳『血族』に見られるような執拗なまでの先祖探索は、それに突き動かされた一典型であろう。

本書は著者の二人の曾祖父、野々村藤助と中林思孝の代に遡って、両者が朝鮮に渡って巨万の富をなし、わが国の近代における植民地政策の一翼を担ったいきさつを縷縷と語り始め、最後は著者一家の朝鮮からの引き揚げの場面に至って筆が置かれている。これが第1部となっていて、第2部、第3部は、反原発運動に力を注いだ著者の自伝とも言ってよいような構成になっているのだが、あえて第1部の内容を以て本書の書名としたのは、自らの血縁への慙愧の念のなせるわざなのであろうか。現に著者自身、本書冒頭の扉の頁で、これまで何度も自らの面汚しな出自を書籍に記述したいと思ったこと、そしてはや語らずにはいられない心境に至ったことを打ち明けているのである。

しかしこうした血筋の罪業は、何も著者のような立場の人だけが負うものではないはずである。なぜなら明治維新以後の殖産興業による富の蓄積と恩恵は、植民地政策の一成果として、一方で労働の搾取という犠牲はあったにせよ、国民の大半にもたらされたのであり、それは戦後の朝鮮独立後の朝鮮戦争によるわが国の経済復興にまで及んでもいる。その意味で言えば、本書第1部は、市民ひとりひとりが批判的に共有しなければならない問題であって、そこにこそ本書が世に問う核心のテーマがあるとすら思われる。

第2部、第3部は、読者もよくご存知の著者の反原発運動における獅子奮迅の活動の足跡が語られている。私自身、原発やリニア新幹線の運動に関わる中で、著者の支援をいただく機会も多いのだが、本書を読み進めていくうちに気付かされた一つの重要な事柄があった。それは第2部、第16章「日本の社会運動に対して抱いた違和感」の中に出てくる。

すなわちそれは原発反対運動の論客が、ほとんど肩書を持つ学者で、一介の市民ではないことである。また研究室のアカデミックな理論もさることながら、より大事なものは原子力で言えば放射能被害をふくむ現場の問題こそが重要とする立場である。従って、専門家の知識を吸い取った上で、その内容を咀嚼し、自分の言葉に翻訳し、自分の言葉で考えるという著者の方法を、市民ひとりひとりがいかにして手にするかを考えねばならないということになる。この専門家にまかせないという態度こそが市民運動の足腰を強くするはずだ。運動に携わる人々の、以て銘すべき一条ではなからうか。

なお本書末尾に、著者35歳の時の手になる二つの短篇小説が付されている。『逮捕』と『水男の物語』の二篇である。前者は空港建設反対運動で逮捕された老女が、検事に対して徐々に優位に立っていく話、後者は少年が山の泉で水のお化けの水男と出会って温かい交流が生じ、結氷に至って水男が消失するファンタジックな話、であるが、権力や自然環境の問題まで思考が及ぶような、才気の溢れた作品である。

広瀬隆エナジー、未だ衰えず

——広瀬隆著『日本の植民地政策とわが家の歴史』（八月書館）書評

木原省治（きはら しょうじ）

原発はごめんだヒロシマ市民の会

読み続けていくうち、だんだんと残りページが少なくなることを寂しく思う本に、久しぶりに出会ったという感じだった。だいたい読むペースの遅い私だけど、本書はまさにイッキという感じで読み終えた。

広瀬さんの著書は、「越山会へ恐怖のプレゼント」、「億万長者はハリウッドを殺す」、「クラウドゼヴィッツの暗号文」にしても、また「いつも月夜とは限らない」、「黒い輪—権力・金・クスリ オリンピックの内幕」しかり、題名の面白さユニークさとともに、推理小説のような身の危険性を感じさせる。そのことが全国に広瀬隆ファンが多い所以だろうが。

1986年のチェルノブイリ原発事故後に出版された「危険な話」は、この事故で盛り上がった原発反対運動に大きな影響を与え、特に女性層から読まれた。それは「広瀬隆現象」とまで形容され、原子力ムラからは「目の上のタンコブ」とされ、悪質な嫌がらせも行われた。私の手元には、たぶん電力会社かその関係団体が作成したと思われる「広瀬氏の論点」と題した、広瀬潰しの一覧表のようなものがある。

しかし広瀬さんは「ノホホン」という感じで、特に気にすることもなく福島原発事故後も「活動的作家」として存在し続けている。その理由、ルーツはどこにあるのだろうか興味深々だったが、本書からほんの一部というかヒントになる部分が見えてきたように思われた。

自身が幸運だった理由を三つ挙げているが、その一つ目に次のように書いている。「私の母方の祖父・野々村謙三が、朝鮮で莫大な富を築いた人間でありながら、1945年の日本の無条件降伏によって無一文に落ちぶれてくれたことの幸運である。その結果、当時のほとんどの人と同じように、戦後のわが家も必死に生きなければならない貧乏人であってくれたのだ。もしわが家が、わずかでも過去の植民地支配の富に頼って、戦後の生活を出発させていたなら、私の人生は、絶えず罪の意識にさいなまれただろうが、幸いにも貧しかったので、そうした負い目をまったく持たずに、自由な思想で、今日まで生きることができた」と。

普通感覚では、大金持ちから無一文になることは、まさに地獄に落とされたような気持ちになるものだろうが、それを「幸い」とするのが、広瀬さんの決して強がりではない『らしさ』なのだろう。

そして広瀬さんはサラリーマンや翻訳家などを経て、主に原子力に反対する運動を広げる作家としての活躍するのだが、その場の生の体験を貪欲に自らの行動に基づく知識として、そのファイルを積み重ねていくところが素晴らしい。

また広瀬さんは自らを『「大学の学歴」を無視する人間で、すべての肩書を嫌う人間である。』と本書の中でたびたび書いていて、『(わたしは)早稲田大学の理工学部の卒業生であることは、間違いない事実なのである。つまり間違っただけで大学を卒業したにすぎなかった人間であるが、…』としている。広瀬さんの基準（尺度）は、あくまでも今何をしているかである。

原爆投下後に広島に降った「黒い雨」、同名の小説を書いた広島県出身の作家井伏鱒二さんとは家族ぐるみの付き合いがあったという。広瀬さんの親戚にも原爆による犠牲者がおられるということで、広瀬さん、私、井伏鱒二さんにつながる線というか、因縁をも感じさせてくれた。

「出る杭は打たれるが、出過ぎた杭は打たれない」、本書は「負を正に」、「諦めを希望に」変えるエネルギーを与えてくれる。しかしそこにあるのは、決して強さだけではない、あふれる優しさがある。最後に書かれている短編と童話が、その二つことを端的に表現しているだろう。

最後ページには、広瀬さんの40年間の活動の中で、繋がりのあった人で既に亡くなられた人61人の名前を挙げ、最後の1行には「この人たちに一輪の花をたむけるのは、心の中だけでよい。

それより、行動だ。行動だよ！！」と。この最後の「よ」という言葉、広瀬さんの話しぶりが、目からと同時に耳からも入ってきた錯覚に感じられた。

「広瀬隆エナジー、未だ衰えず」である。

この本は近代日本の歴史を一から学び直す意味を持つ
——広瀬隆著『日本の植民地政策とわが家の歴史』（八月書館）について

樋口健二（ひぐち けんじ）
報道写真家

広瀬隆氏の『日本の植民地政策とわが家の歴史』は、第1部から第3部までの44章で構成されている。私が強烈に感じたのは第1部である。その感想を述べたい。

明治維新後の明治政府は近代化を進める中で、欧米に追いつけ、追い越せの思想のもと、近隣諸国の植民地化を進め、軍国主義国家への道を突き進む。それが列強国への仲間入りと勘違いしたように、私には思えてならない。

さて、彼のエピグラフを引用させてもらおうと、

「第2章から、ある日いきなり「私の曾祖父、が登場し、わが家の祖先が朝鮮で屈指の大富豪にのぼりつめ、日本の植民地政策を動かす飛車角のごとき重要な駒になってゆくのである。つまり、その富豪の家に呱呱の声をあげた私自身が、日本の植民地政策の犯罪者的な系譜から出た人間だという、読者が卒倒するような実話である。」

と、先祖がたどった真実を克明に表現してやまない。普通感覚の持ち主であれば、海外で成功をおさめれば、得々と語るのがおちである。ところが、氏は国家の犯罪的行為に手を貸した点に心からの反省を込めるのである。

私は日中戦争の勃発した1937年（昭和12年）に生を受けた人間である。軍国主義の真ただ中、国民学校では皇民化教育で軍国主義をたたき込まれた。ぬきさしならぬ第二次大戦のドロ沼に突入し、やがて悲劇のドン底を迎えて敗戦に至った。この下地を作ったのが明治の元勳などと呼ばれた政治家たちであろう。

私自身について触れたのには理由がある。戦後教育の中で、明治政府が犯した戦争の反省などほとんど語られず、いかに国造りに貢献したかを中心に教え込まれ、今日に至ったと言って良いだろう。それを翻してくれたのが本書である。私の記憶の底に浮かび上がって来たのは、黒田清隆、井上馨、山縣有朋、伊藤博文、大久保利通、福沢諭吉、桂太郎、資本家の渋沢栄一、大倉喜八郎、日清戦争で獲得した台湾で悪さをした児玉源太郎、後藤新平など、錚々たる？人物たちである。

ところがである。本を読み進むや、まったく知らされなかった彼らの恐るべき悪行が浮かび上がった。日本の初代首相となった伊藤博文内閣は清国に宣戦布告し、始まったのが「日清戦争」だったのだ。さらに、桂太郎内閣はロシアに対して宣戦布告した。それが「日露戦争」である。どちらも日本が勝利を修めたため、おぞましい現実を美談に仕立てたのであろう。歴史家や史実をしたためた人間たちは、いったいどこを向いていたのか、理解に苦しむ。

国家悪とも言うべき戦争が、あたかも日本が正しかったかのように歴史に刻まれたのも、又、悲劇と言えまいか！ 事実にもとづいて真実を追及した広瀬氏に感謝したい。

少年時代、心に残った言葉がある。「天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらずと言えり」の名言を遺した福沢諭吉にも触れておきたい。広瀬氏は言う。反日暴動の壬午事変後に直ぐ「日本人は重税その他、あらゆる犠牲に耐えて軍備拡張に全力をあげ、清国との戦いに備えるべきである」と、山縣有朋に同調して軍国主義を煽ったのが福沢諭吉だ。福沢の二面性が見事に浮き彫りにされていて悲しい。

もう一人、作家の司馬遼太郎についても手厳しい。日露戦争で日本軍はロシア軍に協力した中国人の首を切り落とし、殺戮の限りをつくした、この殺人戦争を賛美して、満州を植民地化した日本人の犯罪をまったく「なかった」ことにしたのが、『坂の上の雲』という小説であると断罪している。

広瀬氏が作家となった下地は、父親が文学青年だったところにある。大富豪となった祖父は、敗戦と同時に一文無しとなって日本へ帰国している。そんな記述もまた、胸を打つ。

この本は近代日本の歴史を一から学び直す意味を持つ。

「広瀬隆」はこんな人でした

——広瀬隆著『日本の植民地政策とわが家の歴史』（八月書館）を読んで

甘蔗珠恵子（かんしゃ たえこ）

福岡県 曹洞宗 龍國寺

一九八六年、旧ソ連のチェルノブイリ原発大爆発事故の年、友人から手渡されて読んだ、『億万長者はハリウッドを殺す』上、下巻、著者広瀬隆。「こんな、暗殺されかねないことを書く広瀬隆って、どんな人だろう……会ってみたい!」と、強く思った、その最初の印象。「広瀬隆って、どんな人だろう?」に三十年余りを経て、この本は、みごとに、すべて答えてくれました。

その驚きの出自から、三十五歳の時に書いて、羽仁五郎、永六輔氏らに絶賛された珠玉の短編小説までも、ここに掲載の短編、「逮捕」と、童話「水男の物語」は、広瀬さんの純粋でみずみずしい豊かな感性と表現力に震えるほど感動しました。

七十七歳の今日までの広瀬さんの稀有な活動と、そうさせた背景の思想と体験、哲学をも知ることができました。この一人の男性の自分史が、それまでの社会運動、市民運動を根底から揺るがし、絶大な影響を与え、市井の人々の目を開かせ、行動を起こして行くようすも分ります。

15章「党派を無視した反原発市民運動」、16章「日本の社会運動に対して抱いた違和感」、17章「私が考える運動哲学」は、拍手するほど共感しながら読みました。だから反原発市民運動は広がったのだ、と深く納得しました。

『億万長者はハリウッドを殺す』を読んでのちのある日、福岡市内を歩いていると、目に飛び込んできた「広瀬隆」の文字、電柱に貼ってあった一枚のチラシ、十月二十六日、その人の講演会の案内チラシでした。思いがけず早く、お会いできる機会が来ました。その当日、広い会場はいっぱいの人で溢れています。その人は精悍な感じの人でしたが、講演の第一声は柔らかく、静かな語り口で、意外でした。O.H.P.で次々と映し出される映像と、その解説に、聴衆は水を打ったように静まり返り、二時間余りの時間を聴き入り、咳の一つもないという不思議な時間、空間でした。もちろん、初めて聴くチェルノブイリ原発事故の実態の衝撃は、腰を抜かし、奈落の底へ突き落とされた思いでした。

それからすぐに原発関連の本を読み漁り、活動にも積極的に参加して半年、身心共に疲れ果て、重く、沈み込むようなからだを畳に横たえている時、身体の奥の方から、ウワー〜と、何かが衝き上げてきました。私は、思わず身を起こし、傍にあった机に向かって書いていました。「何という悲しい時代を迎えたことでしょうか」と。それから数日間、湧き出てくるままに、何も考えず、ほとんど何も口にせず、書き続けました。それが『まだ、まにあうのなら』でした。このタイトルは、大分の作家「草の根通信」の松下竜一さんがつけて下さいました。知り合ったばかりでしたが、松下さんの著作は多数読んでいましたので、私から直接お願いしました。本当にピッタリの題名で、その時の私の気持、そのままでした。広瀬さんの講演を聴いた衝撃が『まだ、まにあうのなら』を書くきっかけでした。

あのころの広瀬さんは、次々に出版される原子力発電の実態、真相を明かした反原発の本がどれも大ベストセラーになり、日本社会に大きな影響を与えて、社会現象となり、反原発のうねりが広がっていく中、広瀬さんへの誹謗中傷も激しく、広瀬さんはあの人たちに狙われ、殺されるのではないかと、私も、まわりの人達も本気で心配していました。いつも一人で、重いO.H.P.の機器や資料一式を担いで、全国津々浦々の人々の求めに応じて、現地に足を運び、学習会をしてまわっていらっやいました。

この本にも広瀬さん御自身が、何度も身の危険を感じられた場面が書かれていますが、彼らがなぜ、こんな「危険人物」を消さなかったのかと、今となって思います。何がはたらいて、そうなったのか——。

「国策」に抗うということは、戦前、戦中を思えばずいぶんやわらいだのだと思いますが、根本的には変わって、私のような、何の力もない主婦でも、「公安のブラックリストに載っていますよ」と、知人の警察官に注意され、伊方原発の出力調整実験反対の署名集めを大分の人達と全国に呼びかけ、大々的にやっていた時には、盗聴もされていました。そのとき私は「ヘ〜盗聴って本当にあるんだ、こんな名もなき一般市民にも〜」とびっくり仰天し、自分が「何」と対峙しているのかを、あらためて知らしめられたことでした。

広瀬さんの書く本は人々を煽っているという批判を、反原発側の学者さんからも聞いたことがありますが、煽っているのではなく、秀れた語学の才能を駆使し、自ら世界の文献、資料、情報を、時間をかけて徹底的に調べあげて、日本の誰よりも早く、その事実を知って、原発の実態や、世界の不正、不条理の原因を追求し、明らかにしたことを精力的に執筆し、私たちに知らせて下さったのです。広瀬さんの文章には人を動かす力がありました。広瀬さんの、このような一身を懸けた警告を無視し続けた揚句、2011年、福島第一原発の大惨事は起きました。無念でなりません。

この『日本の植民地政策とわが家の歴史』の一冊は、中味がとても濃いです。広くて深いです。ですが、ページをめくるや、ぐいぐいと引き込まれてゆき、休む暇も惜しく、読み通してしまいました。「世界が今、こうなっているのはなぜ?」誰もが思うこの疑問に、広瀬さんは答えています。自ら考える確かな資料を提示してくれています。

新しく出版されたこの本は、広瀬さんの集大成というべきものです。

「広瀬隆」はこんな人でした。